

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」： 指導者の歴史責任感・使命感（中）

夏

剛

目 次

6. 「寡人疾」の「色・勇・貨」と民族美德の勤・勇・智
7. 「天馬行空」の高邁・「鋼鉄コンス公司」の力量パワー
8. 「寵辱不驚」の矜持・「寵辱若驚」の用心
9. 「陽剛・凸満」型の後退と「陰柔・凹空」型の台頭
10. 乱世英雄の無敵・激烈と平時「豎子」の敵無き・微温
11. 「稀代」への期待・「超人」の強迫 - 脅迫観念

6. 「寡人疾」の「色・勇・貨」と民族美德の勤・勇・智

此の2人の独裁指導者に対する評の前後、ニクソンは斯く断った。此の本に書いた指導者の中には、薄っぺらな人物は一人も無い；複雑な動機を持たぬ純真な者人も居ないが、純粹に自己満足の為に権力を欲した人は皆無だ；自己の欲得を超える目的意識の当否はともかく、全員は例外無く偉大な目的の為に奉仕しており、歴史の中に立派な足跡を残しつつあると信じたのだ、と⁴³⁾。大方は真理と認めて良からうが、論理の落し穴も感じる。

ニクソンは周恩来の魔力に就いて、国民党高官の経験を引いた。最初は彼の言う通りだと思かい、互いに歩み寄らねばと考えたが、何日が経つと、此の男は善意かも知れぬけど、観念形態イデオロギーの為盲目に成っていると疑うに至った；誠意なぞ全然無い、偉大な役者である；今笑ったかと思うと、直ぐに泣く；其に連れて、観客も笑ったり泣いたりする；全ては演技なのだ、と⁴⁴⁾。誠意の有無はともかく、周の演技が一流である事は疑問の余地が無い。

彼は学生時代に女装の芝居をした事が有り、建国後も好く公務の間を縫って演劇を観ていた。63年に訪中した日本作家代表团との会見で、彼は団長の劇作家・木下順三を相手に、直近に集中的に観た新劇の話の弾ませた。或る兵士役を演じた俳優の演技の問題で、出来栄えは必ずし

も良くないとか、知識人役の俳優は知識人出身なのに、表現力が弱く発声も上手くないと言った論評は、根っからの芝居好きを窺わせ賓客側を啞然とさせた。

『中国・激動の世の生き方』(毎日新聞社、79年)の中で、経済小説家・城山三郎は此の一齣を記し、其の心の余裕や学生のような行動力に感服する余り、脂粉の漂う座敷で財界人等変り映えせぬ顔を相手に注しつ注されつの自国の政治家の不毛を嘆いた。中国でも「飯局」(宴会)を利用する料亭政治は無くもないが、「上台」(官職に着く。政権を取る)や「下台」(退陣・失脚・下野する)は、舞台・役者に見立てた発想・表現だ。

熟語の「婊子無情、戯子無義」(娼婦は情が無く、役者は義が無い)は、職業差別の嫌いが有りながら一面の真理を持つ。大勢の客と交わる売春婦は一々に本気を出せば、体が幾つ有っても保たないから、絶頂感を装って悦ばせる演技が要るわけだ。俳優は律儀に師匠や同業者に義理を立てつ放しだと、永遠に「配角」(配役)の儘で中央への出番が無い。「婊」の「女・表」と「戯」の「虚・戈」の字形は、実に味わいの深い表徴である。

革命の為なら娼婦や妾に成る事も辞さない、と内戦時代の周恩来は言った。鄧小平の「黒猫・白猫」論よりも露骨な此の現実主義の本音は、共産党中国では流石に公表されていないが、大任の為なら節操を一時的に捨てても構わぬ考えは昔から有る。民間で尊ばれる史上の「四大美人」を觀ても、西施と貂蟬は「美人計」の間諜であり、塞外との親交を図る為の民間外交官・王昭君は、夫君の死後に漢民族の倫理に反して其の息子と結婚した。

橋本首相の在任中に問題と成った中国女性間諜事件は、官庁(衛生部)の職員が巨額の無償援助を引き出す為、厚相時代の彼に親密な交際を仕掛けたのが真相らしい、と言われる⁴⁵⁾。後に日本の外交官と結婚し、中国の国籍を棄てた当の女性は、一部の在日中国人から「民族英雄」と讃えられた。国益の為なら汚い手も許容する論理は、素朴な感情であり複雑な計算であるが、中国では此の2面は大衆だけでなく、指導者も持ち合わせている。

「英雄難過美人関」(英雄も美人の関所は越え難い)と言う様に、戦の試練を共にした妻・賀子珍のソ連滞在中、毛沢東は延安で江青と同棲した。掠奪愛で豪傑を独占した元映画俳優・江は、正に「戯子」なのだ。heroの「英雄・主人公」の両義は、其の一幕で妙に重畳した。不倫を容認した指導部は、上記の「民族英雄」論と通じて、「水至清、則無大魚」と割り切った事か。其の特別扱いは、4半世紀後の2人の暴走の遠因と成った。

其の超法規的な姻縁が民衆の間でも余り嫌悪されなかったのは、英雄は好色の人種で君主は特権を持つとの固定観念や、「食色、性也」(孟子)の人間観が大きい。齊宣王が「寡人有疾、寡人好勇」「寡人有疾、寡人好貨」「寡人有疾、寡人好色」と自白した時も、小勇に走らず慈悲・博愛の精神を持てば良いと孟子は肯定的に応えた⁴⁶⁾。毛は財貨への欲望を罪過と見做したが、残りの2点に於いては、「毛病」(癖。欠点)の有る傑物だ。

中国の皇帝の1人称代名詞で最も良く知られるのは、秦始皇が天子専用の自称と決めた「朕」

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

だ。此の漢字は『角川大辞源』に拠れば、「意符の舟（月は省略形。ふね）と、音符の夂ヨウ チン（きねを繰り返して上げ下げする意。つづく、つく意[略]）とから成る。舟板の継ぎ目の意」だ。「朕」「鎮」「震」の同音（zhen）と合わせれば、「文革」中の毛に捧げられた賛辞の「偉大統帥・偉大舵手」も、其の字源・語義と吻合する様に思う。

古代候王の自称・「孤」「寡人」も、最高指導者の本質を窺わせる。『礼記』の「凡自称、（略）小国之君曰孤」が出典の「孤」は、「意符の子（こ）と、音符の瓜^{クワ} ヨ（ひとつぶの意＝顆^{クワ}）とから成る。一人だけ取り残された子、父母のない子、“みなしご”の意。一説に、音符の瓜は、頼りがない意（＝寡^{クワ}）で、頼る者のない“みなしご”の意という。」（同上）天の大任を1人で受け、孤独を強いられる天子の立場にはぴったりだ。

自ら究極の決断を下す際の孤立無援を愚痴った日本の首相経験者が居るが、権力の頂点の醍醐味も其処に在る。昔の帝の「孤」の自称には、排他的な孤高の矜持や使命感も滲み出ている。「朕」は「真^{チェン}」「珍^{チェン}」「珍^{チェン}」とも音通だが、「真命天子」は元々独りぼっちの存在だ。「孤」と同じ謙称の「寡人」は唐代以降、候王の自称から皇帝の其に変わった。「寡徳（＝徳が寡ない。徳望が薄い）之人」の語義（朱熹の解）も、奇妙な二重性を示唆する。

徳望が厚くなければ人の上に立てないとの理念から、自分の徳は未だ足りぬという謙遜が生じるわけだが、徳が寡なくても支配者に成れる事も厳然な現実だし、為政者には寡徳・寡情（非情）も場合に因っては必要だ。「徳不孤，必有隣」と孔子は主張したが、首長の超絶は徳を削ぐ時も儘有る。晩年の毛の「孤家寡人」化と其の時代の寡頭政治は、「出類」・抜群の「出倫・脱群」（倫理・群衆から逸脱・遊離する事）の危険の証だ。

「寡徳」の謙遜と「鮮廉寡恥」の実質は、字面の様に隣り合う場合も有る。「富国有徳」の理想は「富国寡徳」の裏返しでもあり、「貧国寡徳」の現実は、「人窮志不窮」と対蹠の「人窮志短」でも説明が付く。外交の切札として核爆弾を開発する昨今の貧者には、ズボンが無くても強行する決意の通り、道徳の鈍化の傾向が見られる。「赤条条来，赤条条去」（朝鮮語では「空手来，空手去」）の思い切りは、唯物虚無主義の傾斜に繋がる。

富国強兵の最終目標を悪と見做さぬ限り、毛沢東等が民衆に強いた「勒緊褲帶」（ベルトを引き締める。食物を切り詰める事の譬え）の犠牲は、寧ろ美化の対象にも成るが、偉大な目的への奉仕に関する自認・自信は、「自命不凡」の「驕矜」・錯覚が混じった場合は、私利私欲の心算は無くても独善に陥り、唯意志論の行き過ぎ等で国を誤らす危険が有る。天から大任を与えられた毛も最後に、自分の声を天の声として錯覚した様である。

指導者の虚栄心も国の向上を促す働きが有るとニクソンは言った⁴⁷⁾が、国際社会の異端児たる国々の孤児根性に因る固執と誇示は、過剰な自意識の諸刃の剣の性質を思い知らせる。例のcomplexは「感情を担った表象の複合」「心の中の痼り」（『広辞苑』）の多義を持つが、大任を担ったという感情の重荷や葛藤は、「心中賊」の変種なる後者に化し易い。「痼」の「病・固」

の字形は、硬質の「寡人」の固有の疾やまいの文脈と繋がる。

中国の国民性の特徴にも様々な二重性が有り、儒教が中庸を唱えたのも両極端の差が激しいからだ。但し、中庸は何も凡庸ではない。老子は「治大国如烹小鮮」の逆説を説いたが、中国の規模は其の理想の「小国寡民」と異なるから、二極に跨がる非凡な指導者に由る動的な均衡が望ましい。建国後に続いて来た最高指導部の両輪構造 - 毛沢東と劉少奇・周恩来、鄧小平と胡耀邦・趙紫陽、江沢民と朱鎔基は、そんな陰陽・剛柔の複合体だ。

何れの2人3脚も両側の力点の違いこそ有れ、中華民族の美德とされる勤勉・勇敢・智恵を兼ね備える。毛と周が其々強く見せた大胆不敵と「兢兢業業」は、前の2点に該当するが、3番に当る共通項の深謀遠慮は、2人3脚の結合部の如く安定を保つ支点と成る。中国人社会の「外儒内道」の原理と共に、共産党中国の「外毛内周」の表裏が指摘された⁴⁸⁾。ニクソンも2人の個性に鮮やかな差を見たが、其の観察も未だ深化の余地が有る。

「周は容貌にも話し方や態度にも、洗練され尽くした外交官の風が有る。其に対して毛は野人で動物的な磁力を発散している」、と彼は言う⁴⁹⁾。周は間違い無く聖人君子の部類に入るが、「革命の為なら娼婦に成っても構わぬ」主義の凄味も隠し持った^{もっと}。尤も、論戦中に「小便」云々を言い合ったフルチョフとニクソンの粗野さは、彼とは無縁である。毛が重病で倒れた凶報に接し失禁した彼は、駆け付ける前に自宅に寄り着替えたという⁵⁰⁾。

緊急事態の中の其の冷静な挙動は領袖への尊敬とも取れるし、失態を恥じ自分の形象イメージを維持する努力とも取れよう。「明哲保身」(賢明で身の処し方を心得る[身の安全を図る])という古訓を脳裏に刻んだ能吏の手本と見られがちだが、其の現実主義と毛の浪漫主義は、「日月経天」と「江河行地」の好一対だ。但し、毛は泥臭さの点に於いて、周と別の意味で足が地に着いていた。其の辺、彼は同じ野人の田中角栄と馬が合う処が有った。

7. 「天馬行空」の高邁・「コンス鋼鉄公司」の力量パワー

毛は田中との会見で開口一番、「喧嘩は済みましたか」と言った。其の前、田中は毛と会うなり、便所の拝借を劈頭に申し入れた。兵(闘争)を礼(調和)に持って行こうとした毛と、敢えて礼を欠く駆け引きに出たと言う⁵¹⁾田中は、指向性や器量の違いを見せたが、今世紀の本国で最も強烈な人物である事は一緒だ。こんな分類では鄧は毛・田中型と思えるが、毛が言った彼の「外方内円」の特質も、田中の「コンピューター電脳付き推土機」と通じる。

感情と勘定、軒昂と権衡の対立・統一は、毛沢東にも当然ながら有った。ズボンを買屋に入れても原子爆弾の開発を進めるという彼の決意も、「贖回」(買い戻し)を前提とした計算に基づくのだ。類似の比喻を記者会見で述べた外相・陳毅元帥も、「天衣無縫」の無邪気・完璧の両義を体現した人物だ。周の洗練さに魅せられた所為か、ニクソンは彼を「第一級の詩人」と

讚えた⁵²⁾が、本当の詩人は毛と陳であり、毛こそ其の称賛に値する。

ニクソンは事実を誤認したが、政治の極致は散文よりも詩に似通う、との認識⁵³⁾は間違っていない。鄧は周と同じく実務志向が強いが、「天馬行空」「奇想動天」の政治手法は、毛並みの「大手筆」（大家の作品。大きな規模）を感じさせた。偉大な指導者には詩人は珍しくない、とニクソンは言う⁵⁴⁾が、毛ほど詩作に託す思索が国を動かした政治家は少ない。訪中のニクソンと周が彼の句を要所要所で引いたのは、自然な成り行きである。

周は其の「無限風光在險峰」を引き合いに出し、葉剣英元帥も万里の長城の参観と「^{サミット}頂峰会談」に引っ掛けて、毛の「不到長城非好漢」を口にした。後者は女性排除の発想として、時の米国の^{ファースト・レディー}第一夫人の不満を招いた⁵⁵⁾が、夫君のニクソンにも男性中心主義が見え隠れする。「行動計画を最後まで読み切った男の決断力を以て、敢然として事に当る」という例の周恩来評は、場当りの衝動や優柔不断を女の癖と見る潜在意識の発露にも思える。

『広辞苑』第4版の「女」の「か弱い・やさしいなど、女性の通有性と同類の特性」も、似通った物の見方であるが、か弱さと逆に優しさは肯定される物だ。ニクソンは上記の観察に続いて、「同時に温かい配慮、滲み出る人間の味、絹の様な手触りを持つ」と、周の別の一面を記した。同じ「女」のは、「成年女子。成熟して性的特徴があらわれた女性」と言うが、武田泰淳は中華民族の叢知を、複雑で成熟した女体の情欲に譬えた。

草を食べて乳を出す牛の様な奉仕を続けた周恩来は、遂に膀胱癌に罹り血尿が噴き出る破目と成った。其の重責を分担する為に鄧小平が再び起用されたが、一部の人が恐がる彼を迎える際に、毛は「弁事果断」（果断に事に当る）の能力を認めた上で、「柔中寓剛、綿裏藏針」という熟語を此の「軍師」に贈った。綿の内に針が潜むという比喻は、柔の中に剛を包むのと同義だが、表面は柔和・善良なものの内心は強靱・悪辣である事を言う。

毛は更に、「外面和氣一点、内部是鋼鉄公司」（外は少し柔和で、中は鉄鋼会社）と付け加えた⁵⁶⁾。「鉄鋼」は人を遣っつける武器の見立てだが、若き鄧の渾名・「小鋼砲」も戦闘精神に富む。毛の言葉は韜晦で復活を遂げた鄧の外柔内剛をも形容できるが、中は鉄鋼の様で構わぬけれど、表は少し柔和な方が宜しい、という勧告が真意なのだ。其の先見の明の通り、鄧はやがて「鋼鉄」を出し過ぎ、毛の「鋼鉄」と衝突した故に更迭された。

「鋼鉄・^{コンス}公司」の組み合わせも鋭利と営利の両面を持つが、陰陽の兼備を唱える毛は剛に絶対的な価値を置いた。ニクソンが「今世紀の共産主義運動が生んだ最も頭脳明晰にして非情な人物」と見た周は、毛には未だ物足りなかった様だ。彼は周を後継者にしなかった理由に就いて、手刀で首切りの真似をしながら、此が出来ぬからだと言った⁵⁷⁾。「忍」の「刃・心」の字形に即して言えば、柔軟な強靱と共に露骨な凶刃も要求されるのだ。

例の「勤勞・勇敢・智慧」を吟味しても、最初の3字は「力」を含み、「心」が付く1字は最後に位置する。上記の『広辞苑』の「男」は、「力強い・激しいなど、男に期待されるの

と同類の性質」と言うが、^{くだん}件の第4字・「敢」の字形は此の「激」と通じる。中華民族の3美德に見る男性優位の傾向は、主体を成す民族・漢の「成年男子」の語義や、農耕民族にとって「男」の「田・力」の重みを考えれば、是非を超えて頷けなくなる。

毛沢東は中米国交回復の交渉に当って、内戦時代の米国の調停下の国・共談判で健闘した実績の有る葉剣英元帥を、^{ワーキング・グループ}対米工作小組の責任者に指名した。周恩来が推した黄華（後に外相）も、軍人出身の外交家である。外交官出身の解放軍総参謀部情報部門の責任者・熊向暉の起用も、礼と兵、理と力の二刀流の一環だが、当時52歳の彼に周が期待を掛けた理由には、「年富力強」（春秋に富み気力が充実だ）、という将来性と実力が大きい。

『史記』の「皇帝春秋富，未能治天下」が出典の「春秋に富む」は、年が若くて経験が浅い事から転じて、生い先が長く将来性が有る事を言う。成語の「年高德劭」（年齢も徳も高い）は、年の功を形容するが、「春秋鼎盛」（鼎＝正に）の様に、若さや年齢自体が資本と成り得る。「年富」に「力強」を付けたのは、宋の大儒・朱熹だ。彼は『論語』の「後生可畏」に就いて、「孔子言後生年富力強，足以積学而有待，其勢可畏」と説いた。

其の「力強」と力強さ・激しさは、一昔の熊にはもっと顕著だった。不惑の年を過ぎ外交部の要職に在った彼は、訪中のモンゴメリー英軍元帥の散歩をお供し、^{たまたま}偶々或る劇場に立ち寄り、宋の抗遼英雄・穆桂英を主人公とする芝居を観た。人口に膾炙する此の女性元帥の事績を聞くと、曾てノルマンディー上陸作戦を指揮した賓客は、女が元帥と成った話は面白くない、こんな芝居を好む男と女は本当の男や女ではない、と不快を表わした。

解放軍にも女性将軍が居る事を熊が挙げると、自分は解放軍に敬服して来たけれど、此は解放軍の名誉を損なうのだ、とモンゴメリーは言ったが、貴国の国家元首と軍の総司令も女の女王です、と反撃されて言葉が続かなかった。後に熊が此の一件を報告した処、周恩来は其の遣り過ぎを責めた。曰く、外交の仕事は長年やって来たのに、「求同存異」の原則は未だ分からぬのか；友好人士の個人的な見解には、其処まで反論するまでもない。

相手を黙らせても君の勝利には成るまいと言って、周は「辱罵和恐嚇決不是戦闘」（罵倒と恐喝は決して戦闘ではない）という魯迅の名言を引いて、諷刺と嫌味は決して我々の外交ではないと諭した⁵⁸。熊は謙虚に聞き入れ一層の成熟が出来たが、米国の大学を出て、気配りの名人・周の薫陶を長らく受けたにも拘らず、彼が左様な洗練されぬ反応を示したのは、「血氣方剛」の故の「争強好勝」、及び名誉に敏感な中国人の根性の所為だ。

「年高德劭」の出典は、漢の文学者・揚雄の「吾聞諸伝，老則戒之在得。年弥高而徳弥劭，是孔子之徒與」だ。孔子の「君子有三戒」は、血気が定かでない少年の頃は色欲を戒め、血気が盛んな壮年の頃には鬪争（心）を戒め、血気が衰えた老年には貪欲を戒める、と言う。「寡人有疾」の「好色・好勇・好貨」と見事に対応するが、^{これら}此等の「心中賊」は年齢や血気の具合と関係無く、1人の人間や1つの民族の中に同時に宿る事も有り得る。

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

武田泰淳は中華民族の無抵抗の抵抗から、男ずれした陰・柔の成熟を見出したが、「針鋒相對」の全面対決も此の民族の好みだ。天安門事件後の国際社会での孤立化を乗り切る為に、鄧小平は「決不出頭」（決して先頭に立たぬ）と命じた。「出類拔萃」の志向と対蹠に、「煩惱皆因強出頭」（煩惱の原因は皆、無理に抜きん出ようとする事だ）という警句も有る。が、漢字の「人」「大」「天」の上昇は、正しく「出頭」志向の表徴だ。

「天」が頭を出すと「夫」に成る事は、中国に於ける陽・剛の優位の表徴と思える。闘志の露出を抑える「決不出頭」も、一時の老獪な韜晦に過ぎない。其の終極の目的は他でもなく、人生の爛熟期に強く成りがちで孔夫子が戒めた欲だ。其の「得」と「徳」の同音も意味深長だが、「年高德劭」の「劭」（=美しい）は、年の功の「功」と同じ「力」偏だ。魯迅は侮辱・罵倒と恫喝を戦闘の範疇から排したが、戦闘精神を否定していない。

格言の「人不与天闘」（人は天と闘わぬ）は、人を凌ぐ天への畏敬を提唱する。毛沢東は其に逆らって、「与天（地・人）奮闘，其樂無窮」（天[地・人]を相手に奮闘する，其の楽しみは窮まり無い）と豪語した。其の「欲与天公試比高」（天公と高さを比ぶるを試んとす）⁵⁹⁾の野望や、「人定勝天」（人は必ず天に勝つ）の自信は、「天降大任」と「出類拔萃」を兼ねた上昇志向だが、中共の外交も自ずと「交鋒」（対戦）の側面が強い。

周恩来は対米交渉の人選を考えた際、「談判高手（達人）」・キッシンジャーへの対抗意識が有ったと言う⁶⁰⁾。モンゴメリー元帥の異議を許さなかった熊向暉の態度も、素直な「理直氣壯」（筋が通って意気が盛んな様）だけでなく、相手は伝説的な豪傑だから張り合った、という「年少氣盛」の燃焼も有ろう。元帥に成りたくない兵士は良い兵士ではない、というナポレオンの名言が「文革」後の解放軍で流行ったのは、偶然な事ではない。

劉少奇がインドネシアを訪問した際、護送する相手国の戦闘機が腕を顯示する様に、至近距離の儘で特別機に貼り付いた。国家主席を載せた中国空軍の操縦士は面子に拘り、間を開くよう要請できなかった⁶¹⁾。「好色」「好勇」の程を形容する「色胆包天」「胆大包天」の「包天」は、空と首長の二重の意味で合うが、首長の安全より自己主張を重んじる「個人英雄主義」が罷り通るのは、「逞能・逞強・要強」（強がる）心理の強さの証だ。

8. 「寵辱不驚」の矜持・「寵辱若驚」の用心

和辻哲郎が言った日本人の「戦闘的な恬淡・淑やかな激情」は、中国人の二重性格とも思える。「人不与天闘」と下の句の「男不与女闘」は、其の対立・統一の例に成る。男は女と闘わぬと言うのは、何も女性を尊重する為ではない。モンゴメリーの男性中心主義と通じて、弱者虐めを無能と見做すわけだ。周恩来は外交の場で小国の元首に格別の配慮をし続けたが、「礼義之邦」らしい接遇と心構えは、大国の優位や余裕の裏返しでもある。

彼がアルジェリア大統領をお伴して地方へ行った時、特別機の女性乗務員が深く考えず、先ず自国の総理にお茶を出そうとした。周は自分の前に出された其を然り^さげ^げ無く外賓の方に移し、外賓と乗務員の両方の体面を保った⁶²⁾が、接客の鉄則に反する失態と言わざるを得ない。「狄夷之有君，不如華夏之無」と言い、孔子は中華の優越感と周辺の「野蛮」国への蔑視を顕わにしたが、此の乗務員の無意識な振る舞い方にも其の觀念が露呈した。

周は北京空港でニクソンと初対面する際に、手を差し出した儘の相手の近寄りをじっと待った。数分離れた2人の其の姿を捉えた写真が、彼に由って歴史的な瞬間の公式記録に選ばれた。小国への礼讓と対照的な拘り方には、超大国への対抗意識が窺われる。中国が米大統領を来訪させ、毛が彼を自分の都合の良い時間に邸宅に呼び付けた事に、「朝貢外交」の伝統を見た向きが海外に有るが、老大国の指導者の斯様な矜持はもっと奥深い。

周恩来の叱咤で国交正常化の談判が行き詰まった時、田中角栄は斯^かく言って難局を打開した。我々は誠意が有るからこそ、貴方が東京に行くのではなく、私が北京に来たのだ、と。霞が関の官僚は妙な自尊心から他の官庁に向く事を嫌い、書類の手交も好く中間の街角で行なうと言われる。官庁にも一流、二流と格差が付き、尊卑に関する自意識が肥大するわけだが、中国は日本以上に等級制度が厳しく、栄辱意識も余分に強いのである。

ニクソンが逸早く手を差し伸べたのも、謝罪の含みを持つ拳動なのだ。周恩来が1954年のジュネーブ会議の際、ダレスに儀礼的な握手を求めた処、中国を敵視する彼^かの國務長官から拒否されたが、ニクソンは其の侮辱の是正を心掛けていた⁶³⁾。中国で広く知り渡った周の其の時の恥は、近代以来列強に欺かれ続けた恥辱史の一齣に過ぎぬが、昔の「天朝大国」の傲慢を想起させがちの共産党中国の自強は、左様な反発に由来する処が多い。

真珠湾奇襲の後で遅れて宣戦布告を手交した日本大使に対して、米國務長官は生涯最大の侮辱を覚えた。やがて戦勝で鬱憤を晴らす日が訪れたが、降伏文書に調印する為に重光葵外相が戦艦を上下する際に、米国側は相手国の尊厳と体の不自由な相手への配慮から、其と無く乗員に身近で見守らせた。其の「態度は極めてビジネスライクで、特に友誼的にはあらざりしも又非友誼的にもあらず、適切に万事取り運ばれた」と重光は述べた⁶⁴⁾。

過剰な対応も非礼の冷遇も避ける^{バランス}均衡感覚は、正に礼法の極意である。ニクソン一行に対する中国側の接し方も、同じ繊細・練達・周到さを持つ。周総理は長年の敵対関係や国交の無い現状を勘案して、「以礼相待，不卑不亢，不冷不熱，不強加於人」（礼を以て遇し，卑屈にも高圧的にも成らず，冷たくも熱くもなく，押し付けはしない）との方針を定めた。周恩来外交の傑作と成った此の17文字は、淡々としているが実行は大変難しい。

和辻哲郎は中国人の感情生活の無感動性、波長の長い律動を取り上げて、其の「悠々として迫らぬ」態度は、絶えずこせこせしている日本人にとって、一つの修練の目標とさえも成るとした上で、次の様に断言した。「それは感情の細かなあるいは過敏な動きを超克して到達した

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

境地，すなわち物事に動じなくなった腹の据わりなのではない。もともと彼らは動じないのである。従ってその態度は道徳的な功績を意味するものではない」⁶⁵。

雲雀籠を手に提げて一日中空を見上げている中国人の姿を，彼は感じず動じぬ在り方の典型に挙げた。確かに一部の庶民には，「麻木不仁」（手足が痺れて感覚が無くなる。転じて，精神が麻痺する；無神経）の傾向が見られる。だが，一日中思索や勤務に耽る人間には，同じ「従容不迫」の外観でも，脱道徳の鈍感ではなく道徳的な克己に由る場合が多い。「麻木（＝麻痺）不仁」と「剛毅木訥，近仁」は，紙一重の差しか無い性質である。

鄧小平が5人の子の名前に「木」偏の漢字を選んだのは，孔子の其の6字格言を基にしたと言う⁶⁶。前出の毛沢東の娘・李訥の名の由来も一緒に，姉・李敏の其も同じ孔子の「君子敏於事而慎於言」だ。「柔中寓剛，綿裏藏針」「外面和氣一点，内部是鋼鐵公司」という毛の箴言も，「外鈍内敏（鋭）」の発想である。周と鄧は同工異曲の形で其の大人の風格を体現したが，ダレスに辱められた一件も其の為に，逆に周の美談とも成った。

其の時に何食わぬ顔で振る舞った彼の「不動声色」の冷静は，最高の修養たる「寵辱不驚」の見本に成る。此の熟語は寵愛や侮辱を受けても驚かぬ事に言うが，関連の「寵辱若驚」は，「名誉を得ては，驕らないように注意し，恥辱を受けても，再び繰り返さないように注意し，いつも恐れおののいた態度を取る」（『角川大辞源』）意だ。前者の「得意淡然，失意泰然」と後者の「戰戰兢兢，如履薄冰」は，共に周の超人的な素質である。

『新唐書・盧承慶伝』に出た「寵辱不驚」は，「得失置之度外」と解された⁶⁷）が，最終的に利を求め害を避ける為に，目先の得失を度外視する様にも取れる。『道徳経』が出典の「寵辱若驚」は，「患得患失」（得失に心を悩ます）の比喩ともされる⁶⁸）が，勘定に基づいて感情を制御する点では，儒家的な「寵辱不驚」と一致する。自分への無礼を気に掛けぬ寛容を示し，我慢の末に損失補填を到頭受けた周は，公私俱に瀟洒な勝者と成った。

「天将降大任於斯人也，必先苦其心志，勞其筋骨，餓其体膚，空乏其身，行誼亂其所為，所以動心忍性，曾益其所不能。」本論考の起点である孟子の此の命題は，抜群の能力と超俗の人格を指導者の条件とした勧めに思える。朱鎔基首相の「鞠躬尽瘁，死而後已」「壯士断腕」の決意は，周恩来と諸葛亮を擬った勤勉・勇敢だが，彼の名軍師の智慧には「黒猫」の汚さも有る。其の超常軌の策略に勝った司馬懿も，並み外れた傑物の名に恥じぬ。

「死孔明走生仲達」の物語は伝説化したが，孔明は病没の直前に宿敵に負けたのだ。魯迅は侮辱・罵倒や恐喝を戦闘として認めないが，嫌がらせや揺すぶり等の仁義無き詭計も辞さぬのが彼の真骨頂だ。彼は速戦即決に持ち込むべく，持久戦の構えに徹する司馬へ挑戦状を叩き付け，女性の巾幗（頭巾）と喪服を添えた。男子の胸襟が有れば雌雄を決そう；勇気が無いなら婦人同然だから，此の一式を納めるが良い，と挑発の言を書き連ねた。

女性の豪傑を「巾幗英雄」と礼讃する今と違って，昔は婦人は「小人」と共に養い難い存在

とされていた。此の「性騷擾」(sexual harassmentの中国語訳)を受けて、司馬は内心酷く怒ったが、笑いを作って納め使者を手厚く遇した。部下の怒気を収める為に、わざと雪辱の決戦の意志を上奏し、皇帝の否決を引き出した。鄧小平の「決不出頭」「韜光養晦」(とぼけて雌伏する)と通じる其の忍耐で、孔明は遂に万策尽きた。

「聖人云：“小不忍則乱大謀。”」此の殺し文句で部下を宥めた司馬は聖人の域に達したが、逆の次元は自制できぬ小人だ。中国語の「発作」は癲癇を起す意も有るが、「不便(当场・当面)～」([其の場で・面と向って]～わけには行かぬ)の否定形の連用が多い。孔明の書簡を見た時の司馬の反応は、正に自分の形象や他者の体面を慮る理性の制御だ。黙殺は最高の輕蔑として圧力に転化し得る事を心得たのも、見事な「大謀」である。

歴史は先ず悲劇の形で、次は笑劇の形で2度繰り返す物だ、というギリシアの先哲の言をマルクスが引いた事が有る。99年3月に同じスイスを訪れた江沢民主席は、周恩来と似た試練に直面させられた。彼は連邦議会の歓迎式典で、西藏独立を求める少人数のデモで日程が狂った事に立腹し、挨拶の最中いきなり予定原稿から離れて、東道国の管理能力の低下に不快を表わし、貴方達は此で大事な友人を失った、と大統領に文句を付けた。

世界外交史上の異例な其の一齣は、中国の伝統観念から観ても少し訝られる。例の周恩来の17字方針に照らせば、「以礼相待」「不強加於人」の2点ともずれている。孔子曰く、「己所不欲、勿施於人」(自分が欲しない物事は、他人に押し付けない)。天安門事件の最中に訪中したソ連総書記は、大規模のデモの所為で天安門広場での歓迎式典が台無しに成った。彼も儀礼の場で雷を落としたとすれば、中国側は嬉しいはずが無かった。

自国の失点を棚上げにした事は身勝手の誹りを招き易いが、其の上に場所と相手も具合が悪い。スイスは平和・不戦の象徴たる国で、中国にとっても「往日無冤、近日無仇」の友好国だ。1人当りの国民総生産こそ世界の上位を占めるが、人口や国土の規模は小さい。小国に絡む事も大国の沽券に関わるが、件のスイス大統領は女性だから、「男不與女闘」の禁忌からすれば、二重の「欺軟怕硬」(弱者を虐め強者を恐れる)と思われかねない。

礼儀を欠くと理に於いて先ず3割も失点する(「先輸三分理」。輸=負ける)、という常識が中国に有る。国連で発作的に靴を脱ぎ自席の机を敲いたフルチョフの野人ぶりも、故に笑い草を残す自滅行為にしか映らぬ。元より中華思想の優越感は、「礼儀之邦」の自負に負う処が大きい。大国・大人の度量を訪問先で見せず短気を起すとは、素朴に考えれば、礼儀先進国の名が泣くと思えようが、中国の陰陽原理は常に二重基準を用意している。

9. 「陽剛・凸満」型の後退と「陰柔・凹空」型の台頭

中国流で「発達国家」と言う「先進国」の「先進」は、『論語・先進篇』の次の件が語源だ。

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

「先進於礼楽野人也，後進於礼楽君子也，如用之，則吾從先進。」（先進は儀礼・雅楽に関しては野人〔在野の人。田舎者〕で，後進は其の点で君子〔貴族〕である。若し用いるなら，吾は先進の方を選ぶ。）此の「先進」は「自分より先に（礼を）学んだ者」「先輩」「先に礼を学んでから仕えた者」の諸説が有り，「後進」は其の反対である。

鄧小平の息子の名前に「質方」「朴方」と有るが，質朴の方が却って礼の本質に適う場合も有る。儒教の「以德報怨」の礼讓精神は，過大に美化され独り歩きして来たが，此に基づいて日本への戦争賠償請求を放棄した蒋介石と毛沢東・周恩来は，「対日軟弱外交」の怨念，引いては嫌日感情を民間に残した。「以德報怨」の当否を問う弟子に対して，孔子が「以直（素直）報怨」と説いたのも，遠慮が却って失礼に成る危険を見通した事が。

江主席の素直な^{かみなりをおとす}「大発雷霆」は，宴席での事だから違和感を免れない。但し，革命は「請客吃飯」（御馳走）や作文，刺繍ではなく，風雅も「從容不迫」も，孔子流の「文質彬彬」（上品で礼儀正しい様）や「温良恭儉讓」も無用だ，という毛沢東の放言も一理有る。交際・往来・応対を表わす「応酬」は，和製語義の「互いに遣り取りすること」の様に，鬭争性も含まれる。議論や杯の^{さかずき}応酬の「兵>礼」の性質は，中国では特に顕著である。

孔子は「小不忍則乱大謀」と言った一方，自宅で天子の舞いをやらせた魯の実力者の非礼に就いて，「是可忍，孰不可忍」（^{これ}是が堪忍できるなら，どんな事でも堪忍できよう）と怒った。中国は対^{ベトナム}越南自衛反撃戦も含めて，堪忍袋の緒を切る時に好く此の台詞を言い放つ。神聖視された孔子も政敵や荘重な場で軽佻な歌を歌った芸人に対し，処刑を命じた事が有る。鄧小平の平定動乱と「清除精神汚染」にも，似た「超限界」心理が窺える。

中国で4悪とされる「酒・色・財・氣（怒気）」の中で，「氣」は衝動的な破滅に繋がるので最も有害だ。例の「寡人3疾」は此の順位で当て嵌めれば，危険度は「好勇」>「好貨」>「好色」に成る。ところが，中華民族の2番目の美德の「勇敢」は，此の「好勇」と表裏一体を成す。「和」「平」と逆の「争」「氣」は単独で否定されるが，「争気」（負けん気を出す。〔意地に成って〕頑張る）は，個人や国家の好ましい精神である。

中国人は「得理不讓人」（理が有るとして全く譲らぬ）を潔しとしないが，「拋理力争」（理を盾にあくまでも争う）は立派な態度と見られる。礼・兵の文脈に即して言えば，「兩國交兵，不斬来使」の掟を破って，不退転の決意の徴に敵国の使者を斬る故事は，好く武勇譚として語られる。昭和天皇の招宴で溥儀の側近が唐突に公然と毒見をした事⁶⁹⁾と合わせて，中国は凡そ国際社会の常識や単一の「国際基準」で測り切れぬ部分が多い。

江主席は同じ98年の訪日中，宮中晩餐会で挨拶する際に過去の戦争に言及した。日本の対中援助を「評価する」云々の高い調子の表現と合わせて，訪問先の世論で「非礼」「尊大」の不評を浴びた。一方，中国側は共同声明の中で歴史認識を明記し，米国に吞ませた対台湾の「3不（3つの不支持）」⁷⁰⁾に同調するよう求めたが，日本側に一蹴された。双方の異例の強硬

な応酬に就いて、日本の勝利・中国の失敗と判定する声が両国に出た。

其の不本意・不均衡の結果は、将来の禍根として懸念される。周恩来は国交正常化の談判で、日中の「不正常的な状態」の終了の宣言を提案した。歩み寄りに寄与した其の妙案は、彼一流の叡知として語り継がれて来たが、今回の異変は不自然な状態の再来の兆しか。両国関係に大きな転換が訪れた要因は、国家の力関係や利害と共に指導者の理念や素質が有る。毛の「文革」も細川・村山内閣の夭折も、当人の心的な態度が大きく作用した事だ。

平成の幕開けと天安門事件が起きた89年に、日中の指導者の世代交替が行なわれた。日本の「新領袖」・竹下登がリクルート疑獄で首相を辞め、外相出身の後任者も女性醜聞で直ぐ失脚し、「軽量級」(小渕首相の自称)政権の走馬灯めく循環が始まった。一方、鄧小平は武力鎮圧の後に江沢民を抜擢し自分は引退したが、92年に改革・開放路線と江体制の梃子入れの為に、超法規的な南巡講話を発表し朱鎔基の破格な重用を指示した。

天安門事件の際に学生たちは、こんな嫌味のざれ歌を作った。「周総理，象太陽，照到哪里哪里亮。鄧小平，象月亮，初一十五不一样。」(周総理は太陽の様，到る処に光明をもたらしてくれる。鄧小平は月の様，一日と十五夜とは[形や明るさが]違う。)一点の曇りも無い総理の高潔な人格を讃え，変り身が速く一貫性に欠ける最高実力者を貶すのだが，政治手法や在り方に関して言えば，「周=月型，鄧=太陽型」の観方も成り立つ。

孟子の「大人者，言不必信，行不必果」，孫子の「兵無常勢，水無常形」，韓愈の「聖人無常師」，老子の「聖人無常心，以百姓之心為心」を思い起せば，臨機応変や韜晦から来た鄧の「無節操」の印象は，誤解や浅見の部分が多い。彼は陰柔の極意を身に付けた反面，院政を敷いて憚らぬ晩年の振る舞い方の通り，本質的には強い磁力を放つ独裁者だ。「決不出頭」の控え目で通った周は逆に，太陽の光を中継する月の様な性格が目立つ。

周が終生NO. 2でいた理由には，乱世の平定・中興が強力な指導者を求める事も有った。毛は林彪事件の教訓から安定・団結を重視し，無名・無色の華国鋒を後継者に選んだが，「老实」(誠実。素直)が取り柄の華は，全党・全軍・全国を引っ張る馬力が無い故，自然淘汰の形で降ろされた。鄧小平が江沢民を後釜に据えたのは，毛の最後の選択と似て非なる。革命・戦争等の暴力が後退した時代では，強権より均衡が大切に成ったのだ。

人柄や人望で劉邦や劉備，宋江等が首領と成った事は，東洋的な指導者の1つの類型を示した。松下幸之助が総括した日本の伝統精神 - 「和を尊ぶ」「衆知を集める」「主座を保つ」は，其の指向性を言い表わせる。但し，「経済沙皇」・朱鎔基を江沢民に補佐させた鄧の布石の様に，人事の調整力や気配りだけでは大国の領袖は務まらない。清の光緒帝が西太后の院政から脱出できなかったのも，太陽の光芒や鋼鉄の意志の不足が要因だ。

メージャア元英首相は最近，サッチャー先輩の「車の後部座席から運転する」跋扈を批判したが，其の「陰盛陽衰」は世界的な傾向の様だ。大統領型の首相を目指した中曽根康弘も，本

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

質は自他公認の「風見鶏」だし、彼が認めた「真空首相」の小淵は、何も彼も呑み込む「黒洞」^{ブラック・ホール}じみた陰の極に見える。新しい指導者像の模索も此の価値転換期の課題だが、朦朧か妙に透徹の観が強く満ち欠けが鮮明な月型の突出が、今世紀末の実情である。

冷戦終結の1989年はフランス革命200周年に当たるが、欧州の中華思想の持ち主で有名な彼の国では、毛と並んで最も自尊心の強い政治家と公認されているドゴールの^{イメージ}形象維持の涙ぐるしい努力と対照的に、ミットラン大統領は癌に侵された事実や愛人・私生児の存在を公表した。其は「寡人有疾，寡人好色」の両方を兼ねた告白と言えるが、同じ90年代、レーガン元米大統領も異例な事に、アルツハイマー病に罹った秘密を明かした。

ロシア金融危機とほぼ同時期の98年夏、クリントンは女性醜聞に就いて国民に対し釈明と謝罪を行なった。検察と報道機関の標的と成り、相手に秘め事を克明に暴かれた疑惑は、本人と米国の「奇恥大辱」に違いない。悲劇 喜劇の形で繰り返す歴史の法則を証明するかの様に、24年前の同じ現職大統領の醜聞 - 「水門事件」^{ウォーターゲート}と比べて、衝撃よりも笑劇の要素が多い。此の激情・劇場の事件は道德律の弛緩、及び価値観の変化を映した。

ニクソンの政治生命を断った一連の不正は、政権と自分の名声の維持が目的だから、未だ天下国家や歴史の意識が有ったが、クリントンの行為は次元が違う。中国では「英雄志短，儿女情長」と言う様に、男女の纏綿たる感情は英雄の志の衰退とされる。真剣な「不愛江山愛美人」の浪漫なら、未だ大物の風格が感じられようが、彼は単に欲望の排泄の為に摘み食いをしたに過ぎぬので、耐え難い存在の軽さとして軽蔑されても仕方が無い。

孔子の「三戒」に当て嵌めれば、「血氣既衰」の末に利得に執着した末期政権のニクソンに対して、クリントンの醜聞は「少之時，血氣未定」の故の好色だ。母親と祖母の対立に挟まれた幼年期の体験を持ち出して、クリントン夫妻は其の逸脱を弁護したが、二重の幼児化が感じ取れる。例の中国人女性との艶聞が蒸し返された橋本首相も、氣質の幼児性が色々指摘されたが、2人とも其の^{せい}所為で地位を棒に振らなかった事は意味深長だ。

クリントンは神聖なる大統領執務室で淫行をし、事実を隠すよう嘘も吐いた。其の不真面目・不誠実は日・中流で言えば、「不徳の致す処」を超えて「万死に値する罪」か。なのに議会の弾劾が否決されたのは、私生活の背徳を咎めるよりも国民経済の運営実績を認める社会の意向が勝った事に思える。性的な醜聞と無縁の清潔さで首相に成った海部俊樹等が、治世の拙さで不評に終わった事と共に、指導者に対する評価基準の混沌を感じる。

小淵政権是最悪の世評の中で船出したが、其の後の支持率の急上昇は、危機脱出後の漠然たる安心感が大きいと言う。天安門事件後の鄧は改革促進の号令に因って、武力鎮圧が招いた怨念の解消に成功し、江・朱体制も慎重な伸張で一応の小康を保てた。指導者と民衆は荀子と言う君と臣の様に、舟と水の関係に在るとすれば、即物・即時的な利益を益々^{ますます}重んじる民の水位の低下と連動して、舟は転覆し難く成った反面、座礁し易くも成った。

10. 乱世英雄の無敵・激烈と平時「豎子」の敵無き・微温

「平時の羽田孜，乱世の小沢一郎，大乱世の梶山静六」，という相場が90年代以来の永田町に有ったが，98年の金融動乱の最中の自民党総裁選で勝ったのは，「軍人」・梶山でも「変人」・小泉純一郎でもなく，「凡人」・小淵なのだ。最大派閥の長が数の力で王座を射止めた順当な結果とも見られるが，面貌も前首相に劣り政略結婚したわけでもなく，資金調達力も能力も中クラスの自分が宰相に成ったのは何故か，と本人も自問した。

「人柄か。“天命”だ」と言う自答⁷¹⁾を引き出した記録文学作家・佐野眞一は，智将の梶山や行動力抜群の小沢等を小淵が抜いた秘密に就いて，其の母体の経世会は互いの女性問題をばらし合って失脚を狙う様な凄まじい嫉妬集団で，だからこそ最後は，権力欲に復讐される形で本命たちは自爆し，誰も本気で相手にしなかった彼が残り物を拾う様に長と成った，と分析した⁷²⁾。林彪事件や天安門事件後の中国でも，似た様な構図が見られる。

「天命」は色々な意味合いを持ち，小淵の其は時勢・運命を指した様だ。福田赳夫は総裁選で敗れた時，「天の声にも変な声がある」との迷台詞を残した。毛や鄧の最後の後継者の指名も，奇抜な抜擢の故に当初は変な天声に聞こえた。「天時不如地利，地利不如人和」(孟子)の原理に照らせば，高次の合理性も感じられるが，中国語の「和」と「平」の「引き分け」の語義は，調和・中庸の落とし穴 - 微温・「平庸」(凡庸)を示唆する。

天が大任を人に与えようとする時は，必ず精神の苦痛，筋骨の疲労，肉体の飢餓，身の貧乏，行為の挫折を味わわせ，其の心を発憤させ，本性を堅忍にし，能力を増しておく，という古典的な法則は，段々と通用しなくなった。朱鎔基こそ「反右派」の「残酷闘争，無情打撃」を経験したが，江沢民は党主席に成る前の華国鋒と同じく，政治闘争の修羅場に縁遠かった。同じ段階の小淵は無傷だけでなく，特筆すべき活躍さえ余り見当らない。

「和」は利害・対立を解消する建設性と，勝ちも負けも無い消極性の両面を持つ。華や江の特段抜擢の要因には，無派閥で敵が無い事も有るが，其の敵無き利点の反面，無敵の威力は足りぬ感じだった。「文革」中の「戦無不勝の毛沢東思想万歳」の礼賛は，中共の戦闘精神と制覇願望を窺わせたが，今後の中国や世界の指導者は文字通り「戦無派」世代に成る。越南戦争の際に兵役を逃したクリントンは，其を超えた「非戦派」と言える。

98年自民党総裁選の3候補を，田中角栄の娘・田中真紀子議員は「軍人・変人・凡人」と名付けた。其の年の流行語大賞を授けられた此の形容は，「凡人」当選，「軍人」次点，「変人」3位の結果と合わせて，時代精神の変容を言い得て妙だ。60年代後期に毛の後継者と成った林彪は本物の軍人で，80年代前期に鄧の後継者と目された胡耀邦は理想主義者の「変人」だが，剛腕や浪漫に対する需要は現実主義への其に取って代られた。

戦場行きを避けた経歴で「軍人」と正反対のクリントンは，大統領選挙で対抗馬の「変人」

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

大実業家にも勝った。後に露見した彼の俗物ぶりは、有権者が凡人を選択した事を裏付けた。民衆こそが君主を凌ぐ天だと儒家の先哲は言ったが、其の「天」は艱難の試練を指導者の資格としなくなった。神の死を告げ「超人」の精神を唱えたニーチェの他界と共に、19世紀は終焉を迎えたが、百年後の今はもはや神格の時代や超人の時代ではない。

鄧小平を「雲上人」と評した日本の外務省官僚は、中国側の抗議で餓に成った。「高高在上」「孤家寡人」の含みで逆鱗に触れたわけだが、杜甫の「諸葛大名垂宇宙，万古雲霄一羽毛」の様に、雲の上に居る事自体は格好が良い。其の「孤」と「雲」が複合した「孤雲」は、「孤飛の片雲。比喩貧賤孤苦的人」（『辞海』）の両義だ。日本語には入っていないが、日本で長年活躍して来た韓国棋士・趙治勲は、此の言葉を殊に好んでいる。

主な7棋戦を相継いで制覇した彼は、半世紀ほど前に日本の一流棋士を悉く屈辱的な敗北を喫させた⁷³⁾呉清源（中国系）と並んで、前人未到の偉業を残した伝説的な人物だ。2人は「無限風光在險峰」の通り、非凡な構想力と強靱な精神力、飄逸な王気と強硬な覇気の持ち主だ。「孤雲」は『角川大宇源』で「世を捨てた人のたとえ」と解されるが、異国で孤独や差別に堪えつつ這い上がった呉・趙は、此の語彙の「雲・泥」の両面を示した。

盛運をもたらした青雲の志と泥臭い飢渴精神は、罵倒合戦を演じたニクソンとフルチョフや彼等と闘った毛を含めて、多くの指導者の原動力と精神の支柱だ。此の3人とも貧困の境遇に因り、自強志向が人1倍に強い。「出類拔萃」の語釈で引き合いに出した「草莽」は、在野・野人・草賊等を表す他に、学問の無い事の比喻でもあるが、教養の高い周恩来や魯迅は、没落官僚の家庭の出身者らしい孤憤の故に、雑草の様な強かさを持った。

本名・周樹人の魯迅が選んだ此の筆名は、彼が創った雑誌・『莽原』の名と合わせて、大陸的な規模や陽・剛の氣勢への選好を窺わせる。「魯」は孔子や穆桂英の故郷、梁山泊の草莽英雄の拠点・山東の略称で、「愚か・鈍い」の意も有る。小淵首相の自称・「鈍牛」も、同じ発想から自嘲・謙遜の含みを持つが、「魯」と「莽」（がむしやら我武者羅）が複合した「魯莽」（軽率・無鉄砲）は、赫魯曉夫の「猛（火）牛」じみた振る舞い方を表わせる。

「アラビアの狂犬」の話とも繋がるが、「莽」の字形は草叢の中で犬が奔って兎を追う意だ（『角川大宇源』）。「莽原」（草の好く生い繁った野原）は、「戦闘激情」「気宇壮大」の文脈に跨がる。毛が詞（うた）の中で愛用した「莽」は、「広々とした様」「雲が覆う様」（同上）等の意が有り、「莽蒼」は景色や野原等の茫漠なる様を表わし、「莽莽」は「草深い様。野原が広々と続く様。奥深い様。長く大きい様」（同上）を言う。

興味深い事に、其の「煙雨莽蒼蒼，龜蛇鎖大江」「橫空出世，莽崑崙」「望長城内外，唯余莽莽」⁷⁴⁾は、何れも戦争中の表現であり、「莽」は建国を境に其の詩作から消えた。其の後の作品も相変わらず豪快さに溢れ、視野の広さと懐の深さが際立つが、草莽英雄の泥臭さの稀薄も読み取れる。訪中のニクソンが引用した彼の『満江紅』（1963）は、「要掃除一切害人虫，全無

敵」で結ぶが、此の壮語でさえ書斎の中の空想の匂いがする。

党内の「修正主義」や官僚主義に苛立った毛は、山奥に戻って再び遊撃戦をやると脅かした。権力の腐蝕や平和の微温湯ぬるまじゆに因る野性の衰退に抱いた其の焦燥は、無理も無い感情である。不退転の改革の決意を表した朱谿基は最近、勢いが衰え精彩が無くなった様に見える。蔣経国も同じ「経済沙皇」^{ツァー}⁷⁵⁾の峻烈さを以て、抗日戦争勝利後の経済犯罪退治を指揮したが、其の「打虎」行動の不発も、戦時に勝つとも劣らぬ厄介な盤根錯節せいの所為だ。

曾て周恩来は人民大会堂で外賓と会見した時、地面に這う電線コードの縫れを丁寧にに解し、相手に異様な印象を与えた。彼らしい整理・整頓だが、「麻煩」(面倒、厄介)の山積、「快刀斬乱麻」を遣り切れぬ事情は、其の一齣に凝縮されている。田中首相が侵略戦争に因る「迷惑」を詫びた際、訳語の「麻煩」で周は激怒し、此は通り掛かった女性のスカートに水を零した様こぼな過失に言うのだと咎めたが、周も常に些事に巻き込まれていた。

不治の病で入院する直前も、人民大会堂の電纜の使用権を巡る紛糾で、中央の専属撮影記者が彼に直訴した。一々こんな事も私に裁断させたら、私が居ない時はどうするの、と周は悲しげに言った⁷⁶⁾。役名の通り総てを処理する宿命が負わされたので、毛が貶した其の「事務主義」も仕方が無い。「細緻入微」は彼の才知の大きな特長だが、人・事の矮小化・具体化・些細化が進む時代は、例の「具体而微」の「微型聖人」を量産して行こう。

毛の「継続革命」はドン・キホーテの風車への挑戦と重なるが、「険峰」故の「無限風光」が消え掛かった事も其の冒険心の背景に有ろう。「烹小鮮」の「文火」^{とろび}が性に合わぬ彼は、遂に過激な「放火烧荒(荒原)」を敢行した。好漢に本領を發揮する機会が無い事を、俗に「英雄無武之地」(英雄は武力を用いる場が無い)と言うが、76年天安門事件の「動武」鎮圧の決断も含めて、彼は暴力の激突に満ちた20世紀の指導者に相応しい。

再起後に「文革」の狂瀾を既倒に廻らす鄧に対して、君は僕より有能で良くやった、と周は大手術の前に言った。「鬻子不怕天雷打，死猪不怕開水燙」(鬻は雷を恐れず、死んだ豚は熱湯を恐れぬ)という鄧の度胸も、周の「寵辱不驚」の矜持より一枚上だが、毛は更に上を行っていた。国民党軍の爆弾が至近距離に落ちた時も動じなかった其の従容鎮定は、「泰山崩於前不變色」(泰山が目の前に崩れても顔色を変えぬ)の境地を体現した。

聖人・孔子の「迅雷風烈必變」や「当代大儒」・周恩来の「寵辱若驚」と対照的に、軍人・変人たる彼の超人的な超然ぶりは、中華民族の始祖 - 炎帝・黄帝と同じ狩猟部落の首領の匂いがする。古人の「世無英雄，遂使豎子成名」を引いて、毛は自分の事を謙遜したが、「英雄造時勢」の意味では、彼は英雄の名に恥じない。対句の「時勢造英雄」で言えば、毛が歴史の舞台に上がり中心まで進んだのは、「乱世英雄起四方」の典型である。

「世無英雄，遂使豎子成名」は、戦国時代の齊の名軍師・孫臏(孫子の後裔)に敗けた魏の將軍・龐涓の捨て台詞だが、毛の「統帥・導師」は「軍師」の字面の通りだ。「文革」発動の

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

最終決断をすべく、故郷の山奥の別荘に閉じ籠もって瞑想した彼は、魯迅が述懐に使った此の熟語を思い浮かべた。後に周の逝去の訃報に接した時も、毛は『魯迅選集』に読み耽っていたが、魯迅と心が通じるのは自らを解剖する厳しさが故だと彼は言う。

11. 「稀代」への期待・「超人」の強迫 - 脅迫観念

毛は政治的な遺言たる夫人宛ての書簡の中で、高く吹聴するほど躡く時は痛いという高所恐怖に触れた。小淵は首相在任の一年目に巧く遣った秘密に就いて、期待値を低くする事を挙げた。日本の「凹型文化」の極意を得た心構えだが、白眼視の中の出発は捨て身を可能にし、禍を転じて福と成ったわけだ。逆に、「稀代」云々の期待は毛にとって、動力と共に圧力であり、『易』の「亢龍在天，有悔」の境地に追い詰めた要因でもあった。

魯迅は日中の局地戦争の狼煙が上がった頃、「夢裏依稀慈母淚，城頭變幻大王旗」と書いた。後半に表わされた乱世豪傑の輩出は、世紀の移変に伴って昔話と成りつつあり、上の句に滲み出る等身大の人情味は、一部の「新人類」為政者の特質の中で際立つ。「亢龍」・橋本龍太郎も首相在任中、母親の見舞いに多くの時間を割き、其に対する世論の敲きを最も悲しんだ。小淵も『男はつらいよ』を欠かさずに見て、辺り構わず泣いた程だ。

貧困な故郷と敗戦の廃墟から這い上がった田中角栄と違い、橋本が政治家を志した契機は、体の不自由な父親（代議士、後に厚相）の福祉に賭ける情熱だった。小淵の政界入りの抱負も、最初は天下国家の要素が薄かった。首相経験者の福田・中曽根を交える激戦区・群馬3区での浮沈で、彼も自分なりの「孤憤」を持つが、指導者の使命感が強い中国でも、政治に献身した江沢民や朱鎔基の初期の動機は、人並みの国の救済・建設の様だ。

中国では年寄や大先輩は若者の経験不足を嘲う時、お前が食って来た飯は儂が食って来た塩よりも少ないと好く言う。塩は単に量で飯と較べる物ではなく、辛苦を嘗める含みでも資本と成る。salaryはラテン語で、（古代ローマで兵士に給料として支給された）塩を買う為の代金の意だ⁷⁷。「資歴^{キャリア}」の証に関する中国人の物の見方は、其の「工資^{サラリー}」の語源と通じるが、閱歴・試練の欠乏は次世代の指導者の先天的な欠陥に成りそうだ。

曾て田中角栄は自派の大幹部・竹下登に対し、首相に成るのは10年早いと一喝した。竹下がやがて叛旗を翻した事は、見返してやりたい気持ちも有ろうが、親分に雑巾掛けとして軽んじられたのも無理は無い。去年の金融危機の最中、大学院出の首相は我々の苦しみは分かるまい、という怨嗟が中小企業の経営者から漏れた。小淵も竹下も苦勞人の印象を与えるが、派閥の中で飯を食って来た彼等の諸々の苦勞は、「杯水風波^{コップのなかのあらし}」の類に近い。

毛は旧中国の「一窮二白」（一に窮乏，二に空白）を、最も新しく美しい絵が描ける紙に譬えた。言語貧乏と自認した「真空首相」には、支援材料と成りそうな逆説だが、豎子（小僧。

未熟者)の「一窮二白」は、「豎子不足_二与謀_一」(『史記・項羽紀』)の否定を受ける。毛沢東でさえ功名を成した豎子と英雄の真価との落差を気に掛けたので、過大な期待に応える事は指導者の永遠の課題と言えるが、左様な宿命は最低の要求でもある。

政治家の非英雄化・凡人化・小物化が進む中で、ニクソンの指導者論の中の「神話を作る力」⁷⁸⁾等は、古典に成りつつある気がするが、こんな時勢にこそ超越的な為政者が求められようとも思える。鄧が無名の「黒馬」・江を登場させたのは、「無事^{これ}是名馬」の考慮があったと言われるが、其の南巡講話は「不求有功，但求無過」の事勿れ主義を敲く鞭撻だった。中曽根元首相も同じ外野から、「真空首相」に指導力を見せろと発破を掛けた。

古代候王の自称・「孤」の用例には、「立功展事，開国称孤」⁷⁹⁾と有る。手柄を立て手腕を發揮する事は、指導者の必須条件や存在証明と成る。小淵内閣が国債大量発行の後患を顧みず、当座の景気を強引に押し上げたのも、有権者と為政者の功利意識に因る事だ。国防・治安・国旗国歌に関する重要な法案を次々と通過させ、対中・朝の強硬外交を敢行した事で、「第一級の宰相」等の喝采⁸⁰⁾まで飛び出たが、光の裏の影は見過ごせない。

『産経新聞』連載中の現在進行形の政治模^{シミュレーション}擬小説・『日本侵略』(麻生幾)の中で、共同声明での戦争反省の明記に対する中国の要求を、小淵が原型と思われる首相は激昂して拒否した。日頃の温和な人柄との乖離は周囲を驚かせたが、「弱腰」の評価に最も堪え難いという彼⁸¹⁾らしい反応だ。江主席訪日の際の双方の意地の反発は、旧政権の「対中土下座外交」「対日軟弱外交」の悪評を意識した「表^{パフォーマンス}演」⁸²⁾、君子故の豹変と観て良からう。

外相に就任したばかりの小淵は錢其琛外相に対して、「新米だからお手柔らかに」と挨拶した。其の低姿勢は躁に近い自己宣伝と妙な対を成すが、「軽量級」「無能」の不名誉を無くす為に、必要以上の健気な行動を取るのも人情の常だ。土居健郎は『甘えの構造』(弘文堂、1976)の中で、舐められまいと食って掛かって行く心理を掘り下げたが、江沢民訪日の賓・主の火花を散らす応酬も含めて、左様な先制攻撃は国際社会で儘有る。

小淵は数の力で例の総裁選を制した後、対抗馬だった梶山元官房長官を活用するどころか、電話も1回限り^きで徹底的に干し上げた⁸²⁾。権力の猛者に映る其の態度には、競争相手の高い人気や辣腕に対する恐怖の方が大きい事か。「文革」以来の中国に於いて、国家主席や元総書記が失脚した上で監禁や軟禁を際限無く受けたが、其の超法規的な措置も警戒心に由る物だ。毛の前で催した田中の尿意も、穿った観方をすれば緊張の現われに思う。

一方、米国にNOを言った細川首相は、大人の關係に成ったと颯爽に宣言したが、大人だからこそ諸々の配慮でNOが言える場合も有る。詰まらぬ事で大事な賓客の機嫌を損なった熊向暉も、宋の詩人・辛棄疾の「少年不識愁滋味」の通りで、其の無益な負けん気を責めた周恩来は、「識尽愁滋味」の末に得失を慮る老成の手本だ。前任者が世論を憚って出せなかった法案を易々と通らせた小淵首相も、「鈍牛」故の恐物知らずなのかも知れぬ。

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

「初生牛犢不怕虎」（初生の小牛は虎を恐れぬ）と言うが、他国を気軽に攻撃する米国は、「世界憲兵」の使命感の反面、歴史が浅く侵略された経験が無い事も要因か。戦無派の指導者は戦争の恐ろしさの実感を欠くから、火遊びに走る危険を孕む。曾て毛は米国の原子爆弾を「紙老虎」（張り子の虎）とし、米帝を「外強中干」（見掛けは強そうでも中身は空っぽ）と断じたが、そんな虚勢は米国に限らず今後の国際社会で多く出そうだ。

訪米の小渕首相は大リーグの始球式に出た際、簡単な英語の挨拶も紙に書いて野球帽の裏に隠し、盗み見をしながら読み上げたと言う。日本でも笑い草と成ったが、中空・真空ほど外見に拘る傾向は有る。田中角栄も無理に暗記した英語の演説を海外で行ない、毛沢東も周恩来の前で鄧小平を誉めた時、「^{チャン}politics強」（政治が優れている）と、不慣れで必要も無い英語を使ったが、両方とも外国語・学歴自^{エンブックス}卑の裏返しの背伸びだ。

田中角栄が北京で披露した自作の漢詩は、幼稚な物として世間の評価が低いが、漢詩の本家や詩人・毛へ対抗する健気さ、記者会見で自作の俳句を披露したり、高村光太郎の詩を延々と引いたりした小渕首相や、毛に倣って詩を盛んに書いた江沢民にも見られる。江主席が新聞に其を大々的に発表させたのは、個人崇拜の演出と受け止められているが、新領袖たちの「超人」（権力意志の権化）志向や、神格・強盛・風流への渴望が窺える。

天子専用と成る前の民間の一人称代名詞・「朕」の用例に、『孟子』の「干戈朕，琴朕」と有る。干戈と琴が象徴する武治・文事は、国の富強・繁栄を支える両道だが、両方で共に「出類拔萃」と言える新領袖は、試練や修練が少ない事も有って珍しく成る一方だ。鄧は江の権威を樹てるよう軍事委員会主席に就任させ、「指導核心」の地位を与えたが、「天」に由る其の「抜苗」は、使命感・責任感と脅迫・強迫観念の両方を強めた様だ。

「神」を意味するアフリカの少数民族語の「オプチ」を引いて、俺も神様だと小渕は嬉々に言った⁸³。指導力と「神気」の不足に悩む本心は、其の戯言の裏に見え隠れする。松下幸之助が総括した日本の伝統精神の中で、衆知・和と並ぶ主座が指導力に当たるが、「神気」は即物的な権威の威厳・威风を越えて、思想や気質の規模・超越度の性質が強い。ニクソンが言う大物政治家や高次の政治の非散文的な精神も、此の言葉で言い表わせよう。

孔明の「豊神飄洒」の「豊神」は、例の「飄然とした風貌」の訳では抜けたが、孟子の美学・哲学の神髄は他ならぬ「豊・神」だ。「氣宇軒昂」の用例には、『醒世恒言』の「生得豊姿瀟洒，氣宇軒昂，飄飄有出塵之表」も有る。中国語の「帥」は俗に瀟洒の様をも言うが、統帥・領袖が求められる其の有様は、今や気概より儀表の方に傾いている。清新・颯爽な装いや^{パフォーマンス}「表演」で目立った数人の平成首相は、瀟洒ながら勝者に成れなかった。

最晩年の毛は華国鋒を後継者に選んだ時、甥・毛遠新の「忠厚老实」（忠厚・正直）の評に引っ掛けて、「重厚無文」（重厚・地味）という周勃に関する劉邦の言を引いた。其の選定は人材不足も有って失敗したが、勇敢より智恵・勤勉を求める時代の到来を考えれば、先見性を持

つ方向と言えよう。「華而不実」と対蹠の「脚踏实地」を尊ぶ精神の強まりは、「天降大任」「出類拔萃」型から「不辱君命」型への指導者像の転換と連動する。

「萃」は「鞠躬尽瘁」の「瘁」(疲れ果てる)と通じ、「やつれる」意も有る。「出類拔萃」の指導者は、天の試練でなくとも苦勞や重圧を強いられる。平成の首相の何人かは覚悟や意志の不足で音を上げたが、「文革」中に貢献を否定された某元帥も、功勞は無くても苦勞は有り、苦勞は無くても疲勞は有る、と自弁した。例の「受任無功、軒昂自高」や『荀子・富国』の「勞苦頓萃而愈無功」と共に、任・功・勞の関係が考えさせられる。

(続く)

1999. 9. 26

註

- 43) リチャード・ニクソン『指導者とは』、徳岡孝夫訳、文芸春秋、1986年(原題『LEADERS』、原典1982年)、362頁。「此の2人」とは前文の通り、毛沢東とフルチョフ。
- 44) 47) 49) 52) 53) 54) 63) 78) 同上、254, 365, 266, 263, 264, 同、252, 371 ~ 377頁。
- 45) 加藤昭『橋本首相「中国人女性」とODA 26億円の闇』、『諸君!』1998年6月号。
- 46) 「王曰、大哉言矣、寡人有疾、寡人好勇。対曰、王請無好小勇、夫撫劍疾視曰、彼惡敢当我哉、此匹夫之勇、敵一人者也、王請大之。『詩』云、王赫斯怒、爰整其旅、以遏徂莒、以篤周祜、以対於天下、此文王之勇也、文王一怒而安天下民。『書』曰、天降下民、作之君、作之師、唯曰、其助上帝、寵之四方、有罪無罪、唯我在、天下曷敢有越厥志、一人衡行於天下、武王恥之、此武王之勇也、而武王亦一怒而安天下之民、今王亦一怒而安天下之民、民唯恐王之不好勇也。」「王曰、寡人有疾、寡人好色。対曰、昔者大王好色、愛厥姫、詩云、古公亶甫、來朝走馬、率西水滸、至于岐下、爰及姜女、聿來胥宇、當是時也、内無怨女、外無曠夫、王如好色與百姓同之、於王何有。」(『孟子・梁惠王章句下』)
- 48) 佐々淳行『危機管理のノウハウ PART1』、PHP文庫、1984年、172頁。
- 50) 李志綏著、新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』下、文芸春秋、1994年(原典同年)、341頁。
- 51) 毎日新聞政治部『安保 - 迷走する革新』、角川文庫、1987年、214頁。
- 55) 58) 60) 陳敦徳『毛沢東・尼克松在1972』、崑崙出版社、1988年、307 ~ 308, 128 ~ 129, 129頁。
- 56) 邱石編『共和国重大事件和決策内幕』下、經濟日報出版社、1997年、838頁。
- 57) 同註8。
- 59) 毛沢東『沁園春・雪』(1936)、竹内実訳。武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』、文芸春秋新社、1965年、216頁。
- 61) 62) 李克菲、彭東海『秘密專機上的領袖們』、中共中央党校出版社、1997年、124, 153頁。
- 64) 『重光葵手記』、中央公論社、1986年、540頁。
- 65) 和辻哲郎『風土』(1935年)、岩波文庫、1979年、154 ~ 155頁。
- 66) 譚璐美『それでも地球は回る - 中国と日本とアメリカ』、文芸春秋、1997年、19頁。
- 67) 68) 辞海編輯委員会編『辞海』(1989年版)、上海辞書出版社、1140頁。
- 69) 河原敏明『天皇裕仁の昭和史』、文春文庫、1986年、126 ~ 127頁。
- 70) 「3不」とは、「2つの中国」や「1つの中国、1つの台湾」を支持しないこと；台湾の独

「天降大任」「出類拔萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（中）（夏）

立を支持しないこと；台湾の国連機関への加盟を支持しないこと。

- 71) 72) 82) 佐野眞一『小淵恵三「真空総理」の正体』、『文芸春秋』1999年10月号，124，140，141頁。
- 73) 全盛時代の呉は，打ち込み番碁（通算で敗けた方が1段差に打ち下され，次回から下手の立場に回される様に成る苛酷な試合）で，日本の一流棋士を悉く打ち下した。
- 74) 「煙雨莽蒼蒼，龜蛇鎖大江」（煙れる雨 莽 蒼蒼，龜と蛇と 大江を鎖す）は，『菩薩蛮・黃鶴樓』（1927）；「橫空出世，莽崑崙」（空に横たわりて 世に出ず，莽たり 崑崙）は，『念奴嬌・崑崙』（1935）；「望長城内外，唯余莽莽」（長城の内と外を望めば，唯だ 莽莽たるを 余すのみ）は，『沁園春』（1936）。何れも竹内実訳，出所は59に同じ。
- 75) 其の頃の蔣経国は外国人から「經濟ツァー」，中国で「雍正帝」（清の独裁者）と呼ばれた。（丁依〔江南〕『蔣経国伝』〔香港・文芸書屋，1975年〕，鈴木博訳『蔣経国 - 中国革命の悲劇伝』〔批評社，1981年〕，197頁）。
- 76) 顧保孜『紅牆里的瞬間』，解放軍文芸出版社，1992年，222頁。
- 77) 小稻義男他編『新英和中辞典』第5版，研究社，1985年，1456頁。
- 79) 邱遲『与陳伯之書』，『辞海』1268頁。
- 80) 月刊『Voice』1999年8月号特集『第1次小淵内閣の成績表』，中西輝政，岡崎久彦，岩見隆夫諸氏の見方。
- 81) 麻生幾『日本侵略』，『産経新聞』1999年9月3日。
- 83) 『現職総理に直撃ロングインタビュー - タカモハトもない，俺は凡人宰相だ』，小淵恵三×佐野眞一，『文芸春秋』1999年10月号，150頁。

（Xia Gang, 本学部助教授）